

機関番号：32608

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520256

研究課題名（和文） 21世紀ケルト性の再生と対イングランド関係

研究課題名（英文） Resurgence of Celticism (Celticity)  
in the 21<sup>st</sup> Century and its Relationship to England

研究代表者

水之江 郁子 (MIZUNOE IKUKO)

共立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：40229711

研究成果の概要（和文）：近年の経済的活況とともに活発な動きを見せていたケルト文化圏の状況を把握し、歴史的に支配権を握ってきたイングランドに対する関係の変化を、アイルランド文学を中心に検証することを本研究の目的とした。予期せぬ経済破綻の影響が、最近の文化活動に顕著である一方、20世紀を遡って、C・マーキヴィッチやE・ボウエンが表象する世界に、現代に通じるアイルランド・イングランド関係を見ることができると、最近のアイルランド女性史構築の動きとも関連させて論じることが出来た。

研究成果の概要（英文）：Until unexpected bankruptcy inevitably weakened cultural activities, economic prosperity helped produce a Celtic cultural resurgence in the UK and Ireland, and changed the Celtic areas' relationship to England. My purpose was to understand this cultural situation, and to investigate its impact on literary products mainly of Ireland. Constance Markievicz and Elizabeth Bowen are key figures to consider when exploring the Irish/English relationship from the beginning of the 20<sup>th</sup> century up to the present. They each represent both cultures in one person. Their positions in Irish women's history also shed light upon 'Celtic resilience.'

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学、アイルランド文学、ケルト文化、アイルランド女性史

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 2005年春にロンドンの国立肖像画美術館において開催された特別展'Conquering

England' は、植民地化の中で政治的に抑圧されるアイルランドが、一方でいかに大きな文化的影響力をイングランドに対して及ぼ

し得たかを、著名な文学作品のみでなく、多くの新聞・雑誌や絵画（純粋美術だけではなく、時代を映す風刺画等も含む）に、また両国を行き来する作家たちの言動に、読み取ろうとするものであった。その影響力は当時の政治文化にも反映されるまでになっていたと解説されていた。

これはオクスフォード大学ロイ・フォスター歴史学教授を中心とした考え方を基盤としている。修正主義として反発する声も聞くが、彼の多方面に及ぶ膨大な著作は、世界的に高い評価を受けている。それにもかかわらず、特に日本における文学関係者間では、その内容について丁寧な吟味が行われていないと思われた。

(2) 共和国としての独立に伴い、文化的鎖国状態が長く続いたアイルランドであるが、近年はEUの恩恵を受けつつ、ケルティック・タイガーとして政治的経済的な活力を誇示できるまでになった。EUによる弱小国・地域への支援とも相俟って、ヨーロッパの周縁ケルト文化圏が活性化し、世界に離散したケルト系民族と手を結び、その文化の繁栄を目指してさまざまな活動を展開していることは、ヨーロッパ近年の顕著な動向の一つと捉えることもできると考えた。

(3) 2006年に参加したエクセター大学コーンウォール校での学会'21st Century Celts'にも、考古学、人類学、美術史等の限られた分野の研究対象であったケルト学を、単に過去を対象とするだけではなく、現代と未来を生きる文化として「ケルト性」を捉えようとするものであった。

(4) 以上のような社会背景や全般的な研究状況の中で、筆者は本務校における個人研究として「イギリスとアイルランド 文学史・文化史的観点から両国の関係を探る」というテーマを立てて、数年間の研究を続けてきた。

## 2. 研究の目的

現代におけるヨーロッパのケルト文化圏の中で、おそらく最も顕著に文化的発信を行っていたアイルランドは、特にその文学的領域で目覚ましい展開を見せていた。その成果を通して、ケルト性が未来に向けて発信しているものを汲み取り、主流のイングランド文化に対してみせるスタンスを探ることを目的として、研究を進めた。

(1) まもなく100周年記念を迎えるイースター蜂起を振り返り、その前後に活躍した女性たちを、コンスタンス・マーキヴィッチを中心に研究し、対イングランド意識を含めた「ケルト的」女性の生き方を把握する。それは、近年まで歴史的記憶から削除、抹殺されてきた女性たちでもある。

(2) コンスタンス・マーキヴィッチを初

めとして、アイルランドとイングランドの狭間に生きたアセンダンシー階級の研究を通して、相互の意識の問題を改めて検討する。先行研究がそれなりに積み重ねられてきたものの、特に日本においては充分に関心が向けられてきたとは言えない。

(3) ここ数年に話題作を発表したセバスチャン・バリーやジョン・マッケナ等が描くアイルランド女性像を読み、そこにケルト的特性を示す生き方を探る。

(4) アイルランド英語文学の領域において、最近再評価が進むエリザベス・ボウエンも、アセンダンシー階級の出身であり、アイルランド女性とイングランド女性の特性を併せ持つ点に注目、一作家として作品群を評価すると共に、文化的影響力を持つ一女性としての言動にも丁寧に寄り添い、その生涯を読み解くこと、さらにケルト性との関連も考慮に入れて、総合的考察を加える。

## 3. 研究の方法

(1) 文学本来の作品を読み込むことは欠かせない。現在までの英・愛・加を中心としたさまざまな文学作品渉猟を基盤に、主題の考察を行う。

(2) 同時に、常に文学・文化に関する最新の情報を得ることを心がける。具体的には、*Times Literary Supplement* や *London Review of Books* 等の書評紙を初めとする新聞・雑誌に目をむけ、新しい出版や批評の動向を押さえる。2009年の学会発表は、アイルランドの友人である研究者から寄せられた情報で、予定した作品から、その夏に出版された作品を中心に置くことに変更した。ダブリンやケンブリッジの研究者たちから受ける助言や情報に、大きく負うこともある。

(3) 必ず、現地の学会で発表・発言をして、成果に対するレスポンスを得る。実際に、二度の海外における学会発表を通じて、受けた刺激は計り知れない。文科省の方針も影響して、日本の学期中に開催される海外の学会への参加は、筆者の本務校においてはほとんど不可能であるため、参加可能な学会の選択肢が僅かになってしまったが、その点でも海外の研究者の協力も得て、適切な学会で研究発表を行えたことは収穫であった。

(4) 学会以外の場でも、現地研究者と意見交換をする機会を持つ。今までの学会などを通して培ってきた現地研究者との交流を活用する。今回は、はからずも、取り扱う作品の作者ジョン・マッケナとも、現地研究者の紹介によって、質問や意見の交換をすることが出来て、実りある体験となった。創作をする側の意図と、読み手の解釈は、必ずしも一致する必要がないことを前提としても、やはり思わぬところでヒントを得たり、励まされたりもする。

(5) 作品や作者を、よりよく理解するために、関係の土地や施設を実際に訪問する。コンスタンス・マーキヴィッチの実家となるリサデル・ハウスを訪れた際に、「アセンダンシー階級」の生活を実感できたし、文献で読むだけであったときの理解を超えた、その実感は、その後の研究の方向付けにもなってしまった。個々の例を挙げると切りがないが、エリザベス・ボウエンの描いたコーク郊外の土地、邸宅は跡形もなくなっているが、残された隣接する教会とお墓、その周辺の雰囲気・・・それらに、言葉を越えたメッセージを与えられたような気がする。また、当時の記憶を再現するミュージアムに、アイルランドは国としても地方も、力を入れていることが窺えた。

#### 4. 研究成果

(1) 初年度は、イギリスにおけるアイルランド研究の一拠点となっているリバプール大学付設アイルランド研究所で開催された“New Irelands”と題した the British Association for Irish Studies の学会に参加した。前述のような認識に誤りがないかを含めて、イギリスの研究者たちの関心を探ることができて、有意義であった。

(2) リバプールの帰路に訪問したウォリック大学では、旧知の歴史学者オ・キ教授に面談、歴史学科長マーゴット・フィン教授にも紹介され、ケルト文化圏の最新の動向に関して話を聞いた。その結果として、以下のような仮説を立てるに至った。アイルランド研究に没頭する人々は、視点がアイルランド側にあるため、同時代のイングランド側のあり方については、一定の図式以上を見ようとしない、多様性を認めようとしない傾向が強いということである。フォスターが描くロンドンにおけるアイルランド人の活躍よりも、ダブリンにおけるイギリス人の存在とアイルランド人との軋轢、アイルランド人相互のイギリス観の相違などが多くの関心を集めてやまず、研究もそこへ集中していくことがわかった。

しかし、近年国際的に注目を集めるアイルランド作家セバスチャン・バリーの、最も高い評価を受けた、ブッカー賞のショートリスト作品である *A Long Long Way* におけるイースター蜂起の描き方を見ると、フォスターの歴史観の反映をはっきりと読み取ることができる。

(3) 11月に、イングランド北東部サンダーランド大学で開催された第5回国際アイルランド研究学会“Ireland: At War and Peace”に参加して、前年度より調査を進めていたコンスタンス・マーキヴィッチに関する研究報告を行った。イングランド上流階級に生まれたアングロ・アイリッシュでありながら、ケ

ルトの血を引くことを意識的に主張して生きた女性である。当時のアイルランド・イングランド関係において一つの象徴的な意味を持つ存在として評価し、多くのコメントを受けた。特に、ケルト民族のエトスを「戦士の精神」にあるとしたオーストラリアからの研究者とは、互いに共通する部分を見出した。また、コンスタンスとイエイツとの関係にも触れたので、文学関係の研究者とは、その面で意見交換ができた。

(4) 2008年度は、コンスタンス・マーキヴィッチに関する論文を纏めるための研究となった。前年のアイルランド研究学会で、口頭発表に対して得た反応や議論を踏まえて、資料を見直し整理し、かつ新たな資料を見出し、ケンブリッジ大学図書館及び帝国戦争博物館にて資料閲覧等を行った。コンスタンスは、日本では、ほとんど注目されておらず、論考も著されていない。日本の研究者は、通俗化され、戯画化されたとも言える彼女の表象に疑念をはさまずに、受け入れてきたとも思われる。一方、アイルランド、イギリス、アメリカでは、21世紀に入って、実に多くの書が彼女について言及している。自らの生き方をケルト女性の特質と重ねて、アングロ・アイリッシュの家系にもかかわらず、アイリッシュに成り切ろうとした彼女の生涯を見ていくと、「アイルランドの女性」という雑誌を立ち上げ、女性たちの啓蒙に地道な努力をして、私財を貧しい人々のために投じ、何回も投獄されながら信念を貫いた姿が浮かび上がり、芯の強いケルト的女性の特質を読み取ることが可能である。また、獄中書簡は21世紀の視点からも示唆に富み、決して古びていないことが感動であった。

以上の研究に伴い、彼女に関する資料を整理すると、次の3つに大別できる。 死後もなく著された伝記や評価、 イースター蜂起50周年の1960年代後半以降相次いだ出版物、 最近の再評価を試みた論考等。最近の研究は、近年盛んなアイルランド女性史の構築や記憶の発掘と結びついて展開しているが、特に21世紀に入って出版の研究書等に顕著な成果が見られる。

(5) アベイ座を通して、コンスタンスと親交があったレノックス・ロビンソンは、現在その作品が上演されることは少なく、作家としての評価も高いとはいえないかもしれないが、彼が関係した多くの大作家たちとの関連で記憶されている。10月に参加したダブリンのRoyal Irish Academyにおける学会は、当初彼をテーマとするはずであったが、実際には彼を含むアセンダンシー階級の「大きな館」へとテーマが変更した。その中でアセンダンシーのアイルランド社会における位置づけを考えると、ロビンソンが重要な役割を担うのである。今、彼の芝居を読み直すと、

予想外に面白い。決して泡沫作家ではないと思われた。彼もまた日本では取り上げる研究者がいない存在であるが、アイルランドのイングランドに対する意識を読み取るにふさわしい作家であると思われた。なお、彼は、コンスタンスとも交際があり、研究上も繋がりは深い。

(6)この学会参加で訪れたダブリンでは、国際アイルランド文学協会を通して十数年来の友人であるドロレス・カヴァナ博士と終始協力し合った。そもそもロイヤル・アイリッシュ・アカデミーでの学会から招聘状を得たのも、彼女の助力に負うところがある。さらに、トリニティ・カレッジ・ダブリンの終身教授である詩人ブレンダン・ケネリーにも面会することができた。学期中に訪問する機会がほとんどない昨今は、久しく面会が叶わなかったが、研究の状況を報告して、きめ細かい指導を受けることができた。

(7)2009年度に入り、9月に二つの学会、コーク大学における”Where Ghosts Live”と、イングランド中部のラフバラ大学における”Changes in Contemporary Ireland: Texts and Contexts”に出席した。前者では亡霊、すなわち偉大な文学作品や過去の大作家がその後の創作に与える影響力をテーマとしていた。その中には、前年度のダブリンでの学会と同様に、エリザベス・ボウエンも採り上げられていた。アセンダンシー階級と「大きな館」に纏わる問題である。

(8)コークという土地を訪問したことを活かして、作家ゆかりの地を訪れたり、資料調査を行ったりと、スケジュールを組んだが、なかでも最も刺激的であったのは、その後ラフバラへ移動する途中で、多くのアイルランド人が利用した航路であるバーミンガムへ立ち寄ったときのことである。その市立図書館で入手したバーミンガム周辺におけるアイルランド系の人々に関する情報は非常に興味深いものであった。多文化主義社会において、差別に繋がりやすいために出自を問うことを避けようとする傾向は、カナダなどで顕著であるが、イギリスにも見られなくはない。しかし、その地の歴史と結びついたアイルランド移民の分布や、今でも地元の人々の間に根付いている「アイルランド移民の子孫である」という意識を、様々な集会案内などからも窺うことができたのである。例えばウィリアム・トレヴァーの小説などに描かれた社会を眼前に見る思いであった。

(9)ラフバラ大学における学会のオープニングには、地元ノッティンガムの新聞 *The Irish World* の写真記者が現れて、世界各国からの参加者を撮影、筆者はダブリンからの作家・研究者、ポルトガルの研究所で働くブラジル人と3人で、写真に納まることとなった。そのような新聞が機能していること自体

が、アイルランド人のイングランドにおける独特の位置を示すものであろう。2007年のサンダーランド、2008年のリバプール、2009年のラフバラ・・・どの地においても、イングランドにあって、アイルランド人の歴史が語られ、記憶されている。アイルランドの音楽やダンスが楽しまれ、定期的な集会や学会が開催されている。

(10)ラフバラ大学での学会に出席することになったのは、その学会の主催者に上記サンダーランド大学の学会で、面識を得たことによる。学会テーマが「同時代アイルランドにおける変化」であり、研究発表には現代アイルランドを描く作家として、ジョン・マッケナを選んだ。処女作からほとんど全作品を読んできたが、アイルランド女性を主人公に、19世紀から現代までのアイルランド社会を背景とした短編を組み合わせ、大河小説のような時代の流れや変化を伝える作品ともなっている短編集『リヴァー・フィールド』と、2009年7月末に出版され、同時に *Irish Times* 紙に書評が載って関心を集めた長編小説『僕らの間のスペース』を扱った。発表内容は、はからずもリムリック大学教授ティナ・オトゥールの基調講演と重なる部分が多く、終了後彼女から暖かいコメントを受けた。

(11)2009年度後半からは、再びイングランドとアイルランドの両社会に身を置いた女性をさらに研究し、その生き方と社会との関係を通して、両社会の文化関係を見ていきたいと考えた。具体的には、エリザベス・ボウエンに、初めて本格的な興味を持って挑戦することとなった。新たに書簡等が出版され、*TLS*でも *LRB*でも書評に採り上げられたり、アンソロジーが出たり、ちょうど再評価の動きも活発であることがわかった。この研究の最終年度には論文に纏めることを意図して、取り組み始めた。

(12)ボウエンは、1899年に生まれ、20世紀とともに歩んだ女性作家として人気を博したが、その後戦後を抜け出して自由放逸に向かう社会では、几帳面でとりすぎた印象を与える面があるため看過されがちであった。近年の再評価は、生誕100年の作品再読再評価の機運もあるが、種々の随想等が新たに編纂・出版されたこと、特に30年間にわたり毎週恋人に宛てて書き綴られた手紙が初めて公刊されて、彼女の率直な思いや考えが明らかにされたことなどが、要因となっている。

(13)アイルランド文化に生まれて、イングランド文化(ケルト文化の流れを汲み、その再生に力を入れる地域をいくつも内包する「イギリス」よりも、その支配的地位から「イングランド」という区分がふさわしい)で教育を受け、両者を行き来したボウエンには、イングランドとアイルランドの狭間に身

を置くためのあらゆる経験が降りかかってきた。特に二度の大きな戦争と、その間にはアイルランド独立運動や内戦も体験し、両者間にかつてないほど緊迫した状況を作り出していた時代である。ボウエンが、創作で表現し、実生活で体現する両文化の相克は、問題点を明確にし、それに対する展望も示唆していると思われた。

(14)ボウエンとリッチの書簡と日記は、男女の愛が描かれるだけでなく、それに伴って日々の生活や意識が書き込まれていて、その時代の知とされる二人(一方は新聞雑誌、BBCなど報道の対象になり、アメリカの一流大学からキャンパス在住作家としての招聘が次々にかかる有名作家、他方はカナダの外交官として最高位にあった)が、社会や国家をどのように理解していたかを知ることができる。コーク大学の学会のテーマのように、さまざまな過去の亡霊に付きまといわれたボウエンの作品であるが、その中心的なものが、常にアイルランドとイングランドを行き来した彼女にまとわりついた「意識」である。二つの文化の境界を凍として歩む彼女の姿に、かつてコンスタンス・マーキヴィッチが描いた「ケルトの女性像」を見る思いがして、内面的な静かな戦いにもその特徴が反映していたのだと思われた。ケルト文化が勢いづいたり、下火になったりという表面的な興亡に関わらず、本質的に持つ芯の強さ、必ず跳ね返す力のようなものを感じさせられるのである。

(15)さらに、シェイマス・ヒーニーはアイルランド人が持ちうる複数のアイデンティティを肯定するメッセージを発して、周縁の複数文化が境界をなす場において強いインパクトを与えたと同時に、それは平面的にも垂直的にもさまざまな境界を作り出す現代社会を生きる誰にも当てはまる普遍性があることを示した。その点から鑑みても、上記のような微妙な立場を意識的に生きる現代性が、エリザベス・ボウエンを一層魅力ある存在に高めていると思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

水之江郁子「エリザベス・ボウエンにおける幻想と不協和音 アイルランドとイングランドの狭間で」『共立 国際研究』査読無、No28、pp. 69 - 86、2011.

水之江郁子「コンスタンス・マーキヴィッチ その表象と記憶」『共立 国際研究』査読無、No26、pp. 75 - 99、2009.

〔学会発表〕(計 2件)

Ikuko Mizunoe, "Resilient and Facing their Realities: Women in the Works of John MacKenna," 'Changes in Contemporary Ireland: Texts and Contexts,' 12<sup>th</sup> September 2009, Loughborough University, UK.

Ikuko Mizunoe, "Something to Live for or Something to Die for: Constance Markievicz and What She Represented," 'Ireland: At War and Peace,' 9<sup>th</sup> November 2007, University of Sunderland, UK.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

水之江 郁子 (MIZUNOE IKUKO)

共立女子大学・国際学部・教授

研究者番号: 40229711